

レジスターから見る語彙・構文の選択と英語教育への含意 —— レシピに注目して ——

Selection of Words and Constructions in Recipes and its Implications for English Education

貝 森 有 祐
Kaimori Yusuke

1. はじめに

本稿の目的は、特定のレジスターにおいて観察される表現及びそのレジスターの特性に注目することが、英語教育において有用となる可能性を言語学的観点から提示することである。レシピにおける語彙と構文の選択をケーススタディとすることでこのことを示していく。

本稿では考察対象として、次の語彙と構文に注目する。

- (1) **調理動詞** : barbecue, blanch, braise, broil, deep-fry, fry, grill, hardboil, microwave, poach, roast, sauté, stew, toast, etc. (Beavers & Koontz-Garboden 2012: 351)
- (2) **省略構文** :
 - a. Take 3 eggs. Break ϕ into a bowl. (Massam & Roberge 1989: 135)¹⁾
 - b. 4–5 tbsp ϕ mayonnaise (Klenová 2010: 91–92)
- (3) **複合変化結果構文** : Chop half a red onion into the bowl.²⁾

(1) は調理方法を表す動詞である。1つの動詞が表すことのできる動作には一定の制限が課されることが指摘されている (Levin & Rappaport Hovav 2013; Rappaport Hovav & Levin 1998) もの、調理動詞を用いることで複雑な動作、働きかけ、変化を1つの動詞で表現することが可能である。(2) は省略構文である。(2a) では直接目的語 (*the eggs*), (2b) では *of* がそれぞれ省略されている。通常であれば、状態変化動詞の直接目的語を省略することは困難であり (Rappaport Hovav & Levin 1998; Goldberg 2001, 2005), また、通常であれば前置詞を省略することも許容されない (**the leg ϕ the table; of* を省略)。しかし、レシピにおいては直接目的語や *of* の省略がしばしば観察される。(3) では「玉葱半分を切った」という<状態変化>と「切った玉葱をボールに入れた」という<位置変化>が1つの節によって表現されている。(3) のような構文に対しては一定の制約が課される (貝森 2014; 貝森・野中 2015) が、レシピではこの構文が中立的文脈と比べてより幅広く生起する。

1) 文中で省略されている要素を本稿では「 ϕ 」を用いて表すこととする。

2) <http://recklessbliss.blogspot.jp/2011/06/in-kitchen-with-corn-and-avocado-salad.html> [2015/11/9] より。

以上の現象を見ていくことを通して、これらの現象がレジスターの特性に動機付けられていることを明らかにする。特に、レシピにおいては情報を凝縮して表現する傾向がある (Klenová 2010) ことなどから、(1), (2), (3) の語彙・構文の生起が動機付けられていることを論じる。このような文法とレジスターの関係を考察することを通して、英語教育においてレジスターに注目すること、特に、レジスターにおける表現とレジスターの特性について明示的に指導することが有用である可能性を示す。

第2節では、本稿におけるレジスターの定義を明らかにする。さらに、レジスターと文法の関わりについての先行研究を紹介し、レジスターと文法が密接に関係していることを示す。また、レシピがどのような構造を持っているのかということについても確認する。第3節では注目する現象の特徴をまとめ、中立的文脈と比べたそれらの特異性を示す。第4節ではレシピの特性に注目し、レシピにおける語彙・構文選択の動機付けについて考察する。第5節では本稿での議論を踏まえて、英語教育においてレジスターに注目することの必要性と有用性について述べる。第6節では本稿の議論をまとめる。

2. レシピというレジスター

本節では、本稿における「レジスター」の定義を明らかにし、レジスターと文法の関わり合いについての先行研究を紹介する。さらに、「レシピ」がどのような構造を持ったテキストであるのかについても確認する。

2.1 レジスターの定義

レジスター (register) は一般的に「言語使用域」と訳されることが多く、「職業語や法廷のことばなど、特定の集団や場面に関わる言語変種」(朝日 2015 : 206-207) のことであるとされる。しかし、人によって用語の使い方が異なることがあり、隣接する概念であるジャンル (genre) やスタイル (style) などと混同されることもある (cf. Holmes 2008: 259-264; Hudson 1996: 45-49; Romaine 2001: 21-22)。

Biber (2009) はレジスター、ジャンル、スタイルについて、これらはテキストの異なる種類ではなく、テキストに対する異なる見方であると規定している。即ち、同一のテキストを「レジスター的」、「ジャンルの」、「スタイル的」な見方で分析することが可能である。Biber によるそれぞれの定義は表1に示

表1 レジスター、ジャンル、スタイルの特徴 (Biber 2009 : 16)

Defining characteristic	Register	Genre	Style
Textual focus	sample of text excerpts	complete texts	sample of text excerpts
Linguistic characteristics	any lexico-grammatical feature	specialized expressions, rhetorical organization, formatting	any lexico-grammatical feature
Distribution of linguistic characteristics	frequent and pervasive in texts from the variety	usually once-occurring in the text, in a particular place in the text	frequent and pervasive in texts from the variety
Interpretation	features serve important communicative functions in the register	features are conventionally associated with the genre: the expected format, but often not functional	features are not directly functional; they are preferred because they are aesthetically valued

す通りである。

レジスター的な見方の下では、分析対象としてテキストの抜粋に注目する。テキスト全体の構造に注目するわけではない。注目する特徴としては、テキスト中に頻繁に生起する語彙・文法的特徴である。この見方では、それらの特徴は何らかの伝達機能に結び付いているものと考えられる。つまり、テキストの中で用いられる語彙や文法項目は、伝達における何らかの機能を担っているものとして解釈される。スタイルの見方はレジスター的な見方と類似している点が多いものの、観察された言語的特徴に対する解釈が異なる。観察された語彙・文法的特徴は伝達における機能を果たしているというより、話し手／書き手の美的な好みにより選択されていると考える。レジスター的な見方とスタイル的な見方に対してジャンルの見方では、テキスト全体の構造に注目する。例えば、英語におけるビジネスレターでは、最初に日付、受取人の氏名と住所を書き、その後 *Dear Mr. Jones* などと書き出して本文が続き、最後には *Sincerely* などの表現と差出人の署名が記される、といったように、全体の構成が決まっている。ここでの表現や構成は何らかの伝達の機能を狙って用いられているというより、手紙の体裁として慣習的に決まっているものである。

本稿では上記3つの見方のうち、レジスター的な見方を採用する。即ち、テキスト全体ではなくテキストの抜粋における語彙・文法的特徴に注目し、その特徴がある種の伝達機能と結び付いていると考える。このことから、本稿ではレシビを「レジスター」と呼ぶこととする。

2.2 レジスターと文法

本稿においてレジスターに注目するのは、レジスターと文法が密接な関係にあると考えられるからである。以下ではレジスターと文法が密接な関係にあることを示す先行研究を紹介する。

2.2.1 広告における中間構文 (Fellbaum 1986)

Fellbaum (1986) は、中間構文が広告というレジスターにおいて観察されやすいことを指摘している。中間構文 (middle construction) とは (4) のように、動詞が他動詞であるにもかかわらず、主語が動詞の示す行為を行う動作主ではなく、行為を受ける対象である構文のことを言う。(5) は広告における中間構文の例である。

(4) a. This car sells well.

b. The onion slices easily.

(5) The synthetic lubricant handles cold well, too, pouring easily at 55 degrees below zero. (この合成潤滑油は低温でも扱いやすく、零下55度以下でも楽に注げます)

(松瀬・今泉 2001)

Fellbaum によれば、中間構文の特徴の1つとして、潜在的動作主 (potential agent) が意味的に含まれているということが挙げられる。文には明示的に現れていないものの、「誰でもその動作ができる」という意味を表しており、例えば (4b) は *people in general* を用いて次のように言い換えることが可能である。

- (6) The onion can be sliced easily by people in general. (松瀬・今泉 2001 : 189)

以上のような「誰でもその動作ができる」という意味から、中間構文は「誰でもその動作ができるのであれば、それはその対象（主語指示物）の特性のためである」という、主語指示物の特性や機能を述べるという性質を持つ。そのため、製品の特性・機能について述べる広告文と相性が良く、広告において中間構文が頻繁に用いられる。

2.2.2 スポーツ実況における統語 (Ferguson 1983)

Ferguson (1983) はスポーツ実況 (sports announcer talk) において、通常の文脈とは異なる言語使用が見られることを報告している。Ferguson が扱っている現象の一部を (7) に挙げる。

- (7) a. 代名詞やコピュラの省略 :

- i. [He] hit 307.
- ii. Milburn [is] remaining at first.

- b. 倒置 : Holding up at third is Murphy.

- c. 結果表現 : Joe Ross's caught it *for* a touch-out.

- d. 重い修飾語句 : *left-handed throwing Steve Howe, who in the mini-playoffs or the playoffs just preceding this one, came out ...*

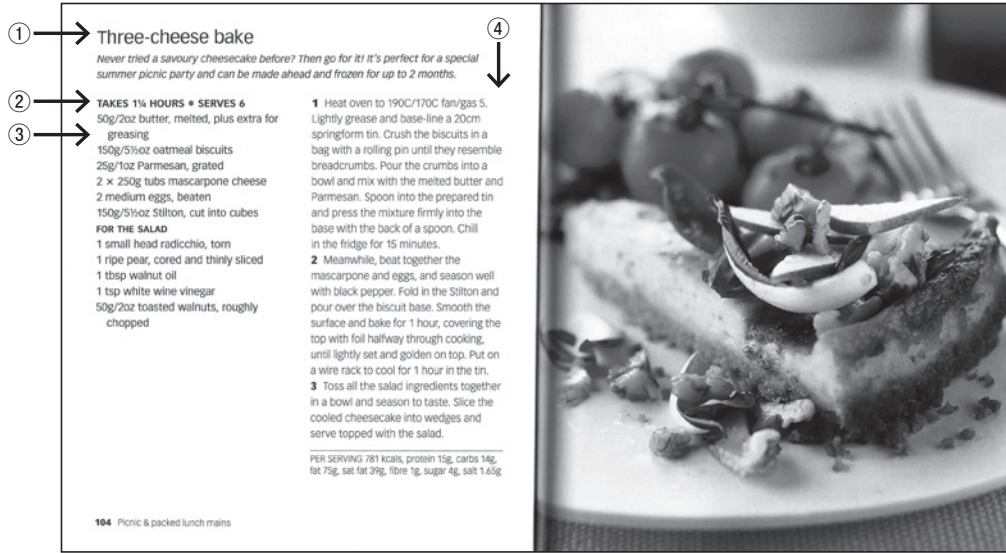
Ferguson は、これらの現象はスポーツ実況というレジスターの中で様々な機能を果たし、同時に、レジスターを形作っているものであると述べている。(7a) のような省略は興奮している印象を与える。同時に、日常会話でもこのような省略は多く見られることから、インフォーマルな雰囲気をも出していると言える。倒置は、動作主が実況者にはっきりと分かるまで動作主の名前への言及を先送りをするため、もしくは、動作主への言及を先送りすることで視聴者の気持ちを高めるために用いられる。重い修飾語句は、実況中に描写対象の背景知識をより多く詰め込むために用いられる。

以上のことから、レジスターと文法現象には密接な関係があることが分かる。本稿ではレシピというレジスターに注目し、語彙・構文の選択を見ていく。

2.3 レシピの構造

レシピにおける文法現象を見る前に、レシピがどのような構造をしているのか簡単に見てみよう。レシピによって細かい書き方などに違いはあるものの、図1に示すように、「①料理名」、「②所要時間・何人分か」、「③材料」、「④調理方法」が記されることは多くの場合共通している。また、栄養価やコメント、補助的な情報などが記されることもある。

図1を見ると分かるように、レシピの大きな特徴の1つは、多くの場合、写真が付いているということである。完成した料理の写真が掲載されていたり、場合によっては、調理過程が写真によって説明されたりすることもある。もう1つの特徴は、特に書籍の場合、ページ数が限られており、そのため説明に用いることのできる文字数に制限があるということである。このように、レシピには独自の構造や特



①料理名 ②所要時間・何人分か ③材料 ④調理手順

図1 レシピの構造 (Sharon Brown, Good Food: 101 Picnics & Packed Lunches, 104–105 より)

徴が認められる。

3. レシピにおける語彙・構文

本節ではレシピにおける語彙と構文の選択を観察し、それらが通常であれば容認困難な表現であるにもかかわらず、レシピにおいては問題なく容認されることを示す。ここでは、調理動詞、省略構文、複合変化結果構文について検討する。

3.1 調理動詞

まずは、調理動詞について見てみよう。

- (8) barbecue, blanch, braise, broil, deep-fry, fry, grill, hardboil, microwave, poach, roast, sauté, stew, toast, etc. (= 1)

これらの動詞は調理方法や調理手順を表す動詞であり、調理に特化したものであると言える。特徴的であるのは、これらの動詞は複雑な動作や、食材への働きかけとその変化を1つの動詞で表しているという点である。例えば *blanch* について Goldberg (2010: 45) は、次のような意味であると述べている。

- (9) [...] the cooking term, *blanch*, refers to immersing food, such as tomatoes, briefly in boiling water, then in cold water (in order to remove skin or heighten colour).

即ち、「食材を沸騰したお湯に通し、その後冷たい水に浸すことで、皮を剥きやすくしたり色を鮮やかにしたりする」という複雑な調理過程を1つの動詞で表している。また、これらの動詞は、「どのように働きかけたか」という〈様態〉と、「働きかけた結果として対象がどのように変化したか」という〈結果〉の両方を1つの動詞で意味していると言える (Beavers & Koontz-Garboden 2012: 351–353; Goldberg 2010: 49–50)。例えば、鳥を *roast* するには *fry* するのとは異なる方法で焼き、その結果として、鳥は *roast* された状態へと変化する。このように、調理動詞は一般的な動詞と比べると複雑な意味を表していると言える。

調理動詞は、語彙意味論で提案されている様態・結果相補性仮説 (manner/result complementarity) (Levin & Rappaport Hovav 2013; Rappaport Hovav & Levin 1998) への反例として考えられ得るものである。様態・結果相補性仮説とは動詞の意味に課される制約であり、1つの動詞で表すことのできる意味には限りがあるとする制約である。より具体的には、次のようなものである (Levin & Rappaport Hovav 2013: 50)。

- (10) MANNER/RESULT COMPLEMENTARITY: Manner and result meaning components are in complementary distribution: a verb lexicalizes only one.

つまり、1つの動詞がその意味として含むことができるのは、〈様態〉(どのように働きかけをしたか) か〈結果〉(働きかけの結果としてどのような結果状態になったか) のどちらか一方のみであり、両方を同時に含むことはないとする。〈様態〉のみを表す動詞は様態動詞 (manner verb) と呼ばれ、〈結果〉のみを表す動詞は結果動詞 (result verb) と呼ばれる。(11) にそれらの例を示す³⁾。

- (11) a. 様態動詞 (manner verb) : hit, kick, pour, shake, shovel, slap, wipe, ...
 b. 結果動詞 (result verb) : break, crack, fill, empty, melt, open, shatter, ...

(Levin & Rappaport Hovav 2013: 52)

しかし、先に見たように、調理動詞においては〈様態〉と〈結果〉を同時に表すものや複雑な動作を表すものが数多く観察される。そのような点で、調理動詞は様態・結果相補性仮説に対して問題を提起するものであり、一般的な動詞と比べると、特異性が認められると言える。

3.2 省略構文

レシピにおいては省略構文が頻繁に観察される。以下がその例である。

- (12) 直接目的語の省略:
 a. Take 3 eggs. Break ϕ into a bowl. (= 2a)

3) 動詞 *cut* のような、〈様態〉と〈結果〉を1つの動詞で表しているように思われる事例の扱いについては、Levin & Rappaport Hovav (2013) を参照。

b. Slice the onion finely, brown ϕ in the butter and then place ϕ in a small dish.

(Brown & Yule 1983: 175)

(13) 前置詞 *of* の省略 :

- a. 4-5 tbsp ϕ mayonnaise (= 2b)
- b. 50g/2oz ϕ toasted walnuts, roughly chopped

(Sharon Brown, Good Food: 101 Picnics & Packed Lunches, 104)

(12a) では 3 *eggs*, (12b) では *the onion* が省略されている。(12a, b) においては状態変化動詞 (それぞれ *break*, *brown*) の直接目的語が省略されているが, 中立的な文脈において状態変化動詞の直接目的語を省略することは困難であることが指摘されている (Rappaport Hovav & Levin 1998 : 102).

- (14) a. Leslie swept ϕ .
- b. *Kelly broke ϕ .

動詞 *sweep* は状態変化を含意しない働きかけ動詞 (様態動詞) であるが, 働きかけ動詞の場合, 特別な文脈なしで直接目的語を省略することが可能である (14a). 一方で状態変化動詞 (結果動詞) の場合, 特別な文脈なしで直接目的語を省略することは困難であり (14b), 直接目的語を省略するには (15b-f) のような, 変化対象が背景化されて動作が前景化される特別な読みが必要とされる (Goldberg 2001, 2005). このことは (16) の原則としてまとめられている.

- (15) a. *The tiger killed ϕ .
- b. Tigers only kill ϕ at night. [= Generic Action]
- c. The chef chopped ϕ and diced ϕ all day. [= Repeated Action]
- d. She picked up her carving knife and began to chop ϕ . [= Narrow Focus]
- e. Why would they give this creep a light prison term!? He murdered ϕ ! [= Strong Affective Stance]
- f. She could steal ϕ but she could not rob ϕ . [= Contrastive Focus]

(Goldberg 2005: 29-30)

(16) Principle of Omission under Low Discourse Prominence:

Omission of the patient argument is possible when the patient argument is construed to be deemphasized in the discourse vis a vis the action. That is, omission is possible when the patient argument is not topical (or focal) in the discourse, and the action is particularly emphasized (via repetition, strong affective stance, discourse topicality, contrastive focus, etc.).

(Goldberg 2001: 514, 2005: 29)

しかし, レシピにおいてはそのような特別な読みを必要とすることなく, 状態変化動詞の直接目的語を省略することが容易に可能である. そのような点において, レシピにおける直接目的語の省略は, 文の意味解釈というよりはレジスターによって動機付けられているとすることができる.

(13a, b) においては前置詞 *of* が省略されている。このような省略はレシピの「材料」部分 (図1を参照) において特に頻繁に観察される。前置詞 *of* を省略することは, (17) に示すように, 通常であれば容認されない。

- (17) a. *the leg ϕ the table
 b. *a friend ϕ my brother

以上のことから, 通常は省略することが困難である要素がレシピにおいては省略可能であることが分かる。

3.3 複合変化結果構文

次に, (18) のように, 単一節内に<状態変化>と<位置変化>が共起している構文について見てみる。状態変化動詞 (*crack, shell*) が経路句 (*into the bowl, onto the plate*) を伴う事例である。このような構文を本稿では複合変化結果構文 (complex-change resultative) と呼ぶこととする (貝森 2014; 貝森・野中 2015)⁴⁾。

- (18) a. The cook cracked the eggs into the bowl.
 b. Daphne shelled the peas onto the plate.

(Levin & Rappaport Hovav 1995: 60)

例えば (18a) においては, 「卵が割れる」という<状態変化>と, 「卵 (の中身) をボールに入れる」という<位置変化>が単一節内に両立している。一般的には, 1つの節において生起可能なく変化>は1つであるとされている (Goldberg 1991, 1995: 81-89)⁵⁾ ため, (18) のような事例はその例外であると言われることもある (奥野 2003; Yasuhara 2013)。さらに, (18) のような構文には (19) の制約が課される。

4) 第3.3節と第4.2節「複合変化結果構文」部分については, 貝森 (2014) 及び貝森・野中 (2015) に部分的に基づいている。

5) 1つの節に1つの<変化>しか生起できないという制約は, Goldberg (1991, 1995) において単一経路制約 (Unique Path Constraint) と呼ばれており, 以下の事例を排除するために必要な制約である。

- (i) *Sam kicked Bill black and blue out of the room.
 (ii) *The box arrived open.

(Goldberg 1991)

(i) では「ビルをあざだらけにした」という<状態変化>と, 「ビルを部屋から出した」という<位置変化>が単一節内に両立しているが, このような事例は容認不可能である。(ii) は「箱が着いた結果として, 箱が開いた」と解釈することはできない。「箱が着く」という<位置変化>と「箱が開く」という<状態変化>が単一節内に両立してしまうため, 単一経路制約によって排除されることになる。

- (19) **時間的一体性の条件**：＜状態変化＞と＜位置変化＞が1つの変化の一連の段階を形成し、併せて1つの事象であると解釈可能である時、複合変化結果構文は容認可能となる
(貝森 2014; 貝森・野中 2015; cf. Matsumoto to appear)

(19) の制約により、意味解釈による (20) の容認性の違いが説明可能である。

- (20) I broke the mirror into the garbage pail. (Levin & Rappaport Hovav 1995: 61)⁶⁾

- ① **可能な意味解釈**：「ゴミ箱の上で鏡を割っていき、それぞれの破片をそのままゴミ箱に入れていった」
② **不可能な意味解釈**：「鏡を粉々に割り、それから、破片をゴミ箱に入れた」

つまり、①のように、「一方の変化（鏡を割る）にそのまま引き続く形でもう一方の変化（鏡の破片をゴミ箱に入れる）が生じる」という意味解釈の下であれば (20) は容認可能である。一方、②のように、「一方の変化が生じ、その後、もう一方の変化が生じる」という解釈の下では、(20) は容認することができない。このように、複合変化結果構文には (19) の制約が課されることが分かる。

しかし、レシピにおいては、(19) の制約に違反していると思われる事例が観察される。(21) に例を示す。

- (21) Chop half a red onion into the bowl. (= 3)

(21) においては、「玉葱半分をみじん切りにする」という＜状態変化＞と、「みじん切りにした玉葱をボールに入れる」という＜位置変化＞が単一節内に両立している。しかしこの場合、「玉葱半分をみじん切りにする」ことにそのまま引き続いて「みじん切りにした玉葱をボールに入れる」ということが生じているわけではない。まな板の上でみじん切りにし、その後、みじん切りにしたものをボールに移しているため、(19) の制約に厳密には違反していることになる。それにもかかわらず、レシピにおいては (21) のように表現することがある。このことから、(19) の制約はレシピにおいては緩和されることがあると言うことができる⁷⁾。

以上、動詞、省略構文、複合変化結果構文について、レシピにおいては通常とは異なる性質や振る舞いが観察されることを示した。このことは、これらの性質や振る舞いが、少なくとも一定程度、レシピというレジスターによって動機付けられている可能性を示唆するものである。

6) Levin & Rappaport Hovav (1995 : 61) では (20) の文を容認不可能であるとしているが、ネイティブスピーカーに確認したところ、(20) に挙げた「可能な意味解釈」の下であれば、(20) の文は問題なく容認可能であるという判断を得たため、ここではアスタリスクを外してある。この点については Yasuhara (2013) の議論も参照。

7) 「玉葱半分をまな板の上でみじん切りにして、それから、ボールに移す」という解釈で容認可能かどうかということをネイティブスピーカーに確認したところ、その解釈の下で容認可能であるという判断を得た。

4. 考察

本節では、第3節で見た語彙・構文の選択がレシピというレジスターによって動機付けられていることを示す。レシピのレジスターとしての特性を確認し、そしてレシピにおける語彙・構文の選択と制約についてレジスターの観点から検討する。

4.1 レジスターとしてのレシピの特徴

レジスターに関する研究 (Ferguson 1994; Kittredge 1982; Klenová 2010) において、レシピは簡素化されたレジスター (simplified register) としての特徴を示すことが指摘されている。Ferguson (1981, 1982) によれば簡素化されたレジスターとは、標準言語 (standard language) よりも語彙や文法が顕著に simple であるレジスターのことである。simple であるとは、例えば用いられる語彙や文法項目の種類が通常よりも限定的であること、コンピュータや代名詞、機能語が通常よりも省略されやすいことなどがこれに該当する。しかし単に simple であるというだけでなく、レジスターの simplicity はどこか他の部分の complexity によって補われている可能性もある。加えて、標準言語には見られない特徴が観察されることもある。

レシピにおける語彙や文法が限定的であるということは、例えば次の点に認めることができる (Kittredge 1982 : 127)。

- (22) a. 固有名詞：生起しない
- b. 人間名詞：生起しない
- c. 疑問文：生起しない
- d. 関係節非制限的用法・埋め込まれた補部：顕著に少ない
- e. 受動文・分裂文：顕著に少ない

レシピは特定の個人ではなく一般の人々に向けられたものであるために、固有名詞や人間名詞が現れないと考えることができるかもしれない。また、レシピはインストラクションの一種であることから、疑問文は生起しないと考えられる (一方で、Kittredge も指摘しているように、命令文は非常に頻繁に生起する)。加えて、(22d) のような従属構造や (22e) のような話題化構造といった複雑な統語構造が避けられる傾向にあることも分かる。

省略については、先に述べた直接目的語省略 (12) や前置詞 *of* の省略 (13) に加え、次のような省略も頻繁に観察される。

- (23) a. 定冠詞 *the* の省略
 Allow ϕ yeast to soften in ϕ warm water, for about 5 minutes, along with the honey. (Kittredge 1982: 114–115)
- b. *until* 節における省略
 Add the fish and poach for 2–3 minutes until ϕ flaky. (Klenová 2010: 90)

(23a) では定冠詞 *the* が省略されており, (23b) では *it is* が省略されている. このようにレシピにおいて様々な種類の省略が用いられることなどに基づき, Klenová (2010: 93) は, レシピにおいては一文を短くし情報を凝縮して表現する傾向があると述べている. この傾向は, 第2.3節で述べたような, 文字数の制限によっても動機付けられていると考えることができるだろう.

以上のように, レシピは簡素化されたレジスターの特徴を示している. 選択される語彙や文法が限定的であり, また, 様々な種類の省略が用いられ, 情報を凝縮して表現する傾向が認められる.

4.2 語彙・構文の選択再考

以上で述べてきたレシピのレジスターとしての特性に基づいて, 第3節で見た語彙・構文の選択について考えてみよう.

調理動詞

まずは調理動詞についてであるが, これらの動詞は第3.1節で見たように, 複雑な調理手順・方法を1つの動詞で表現することが可能である. 例えば *blanch* という動詞を用いなければ, *immersing food briefly in boiling water, then in cold water* などと説明しなければならず, 加えてその目的 (*in order to remove skin or heighten colour*) についても説明しなければならない. そのため, 調理動詞を用いることは「情報を凝縮する」というレシピの特徴に適っている.

第3.1節ではまた, 動詞の意味に課されると考えられている様態・結果相補性仮説が調理動詞においては成り立たないことを見た. 調理動詞に加えて, 次の動詞も<様態>と<結果>の両方を同時に表しており, 従って, 様態・結果相補性仮説への反例となることが指摘されている.

(24) a. **筆記動詞** : scribble, scrawl, jot down

b. **作成動詞** : manufacture

c. **考案動詞** : concoct, contrive, scheme, invent, conceive, hatch, dream up, formulate

(Goldberg 2010: 49)

(25) **殺害様態動詞** : crucify, drown, electrocute, guillotine, hang

(Beavers & Koontz-Garboden 2012: 335)

このように見ると, 様態・結果相補性仮説への反例となり得る動詞は, 特定の領域において観察されることが多いことが分かる (cf. Beavers & Koontz-Garboden 2012). これは, 特定の領域において手段や方法を詳細に区別するためであると思われる. 例えば殺害様態動詞であれば, 殺害や死刑という特定の領域において, 死に至らせる様々な方法を区別するために用いられる. このことから, 様態・結果相補性仮説は, 一般的な動詞においては成り立つことが多いものの, 特定の領域におけるより詳細な区別を表す時には必ずしも成り立たないと考えることができる. これは, 様態・結果相補性仮説を検討することにおいて, レジスターについても考慮する必要があることを示唆している. つまり, 様態・結果相補性仮説が正しいか否かの二分法ではなく, どのような時に成り立ちどのような時に成り立たないのかについても, レジスターを参照しながら検討していく必要がある.

Goldberg (2010: 50) は事態が1つの動詞として語彙化される条件として、(26) の制約を提案している。

- (26) **Conventional Frame constraint:** For a situation to be labelled by a verb, the situation or experience may be hypothetical or historical and need not be directly experienced, but it is necessary that the situation or experience evoke a cultural unit that is familiar and relevant to those who use the word.

つまり、ある事態が1つの動詞となるには、それがひとかたまりの文化的ユニットとなっている必要があるということである。動詞 *blanch* は複雑な動作を1つの動詞で表しているが、それは慣習的に共有された調理手順・方法という1つの文化的ユニットを成しているからであると説明される。本稿の観点からすると、そのような複雑な動作がひとかたまりの文化的ユニットを形成するようになったのは、レシピという慣習化されたレジスターに依っていると考えることができる。特定のレジスターにおいて繰り返し表現される手順・方法は、1つの動詞として語彙化することによって短く効率的に伝えることが可能となる。

省略構文

Klenová (2010: 93) も指摘しているように、要素を省略することは情報を凝縮する上で最適な手段の1つである。では何故、レシピにおいては直接目的語や前置詞 *of* を省略しても容認不可能な表現とはならないのであろうか。

中立的な文脈において、状態変化動詞が伴う直接目的語を省略することができない (14b, 15a) のは、状態変化動詞は対象の変化について述べるものであり、変化対象が重要な情報となるからである。重要な情報である変化対象を省略することは困難であり、省略するには Goldberg (2001, 2005) が挙げるような、変化対象が背景化される特殊な読みが必要となる。

一方でレシピの場合、状態変化動詞であっても直接目的語が省略されることがある (12)。レシピにおいても状態変化動詞が対象の変化について述べるものであることに変わりはないが、その変化は一連の調理手順の1つである。その前後においても対象に様々な状態変化/位置変化が加えられており、要素が省略されていても意味的に復元することが容易である。また、(12b) を見ると明らかであるように、省略された要素は加工を経て生じてくるものであり、言語的に実現していないものであることが多い。例えば (12b) における動詞 *brown* の直接目的語に当たるものは、厳密に言えば、「細かく切られた玉葱」であり、*the onion* そのものではない。動詞 *place* の直接目的語に当たるものは「切られてバターで炒められた玉葱」であると言える (Brown & Yule 1983: 175-176)。このように照応先が言語的に実現していないことから、直接目的語の省略が促されている可能性がある (野中 2015)。まとめると、レシピにおいては、①情報を凝縮して表現する傾向があり、省略はそれに適った手段であること、②表している状態変化は一連の調理手順の1つであり、省略された要素を意味的に復元することが容易であること、③省略された要素の照応先は言語的に実現していないことが多いこと、などの要因が合わさって、直接目的語の省略が可能となるのではないかと思われる。

前置詞 *of* の省略について注目すべきなのは、レシピにおいて *of* が省略される場合、「単位 *of* 材料」

の構造をしており、2つの要素の関係が明白であるということである。加えて、特に「材料」部分（図1）に現れるということも、それがある単位分の材料であることを示す手がかりとなる。このように、直接目的語と前置詞 *of* の省略は、レシピのレジスターとしての特性に動機付けられていると考えることができる。

複合変化結果構文

複合変化結果構文は、通常であれば2つの節で表される〈状態変化〉と〈位置変化〉を単一節で表すことができる構文である。そのため、情報を凝縮して表現するという傾向に適った言語的手段であると言える。(21)が(19)の時間的一体性の条件に違反しており、通常であれば容認することが難しいはずであるにもかかわらず、レシピにおいて容認されるのは、レシピが慣習的・日常的シナリオを喚起するからであると思われる (cf. 吉川 2009)。つまり、「食材を切って入れる」ということが1つの調理手順として見なされ、2つの別々の事象ではなく1つの事象として見なされることから、単一節で表現することが可能となるように思われる。レシピの文脈ではなく、慣習的・日常的シナリオを認めにくい場合には、(27)に示すように、複合変化結果構文ではなく2つの節で表現することが選択される。

- (27) a. It was so interesting – they are recycling – they break different kinds of glass bottles into molds and then put them into these mud ovens to melt back together. [単一節 (複合変化結果構文)]
- b. It was so interesting – they are recycling – they break different kinds of glass bottles and put them into molds and then put them into these mud ovens to melt back together.⁸⁾ [複数節]

(27)の表す状況は、「様々な種類のガラスを粉々に砕き（状態変化）、その後、砕いたガラスを鋳型に入れる（位置変化）」というものである。2つの変化が直接引き続いて生起しているとは言えず、(19)の時間的一体性の条件に違反している。加えて、この状況描写においては、レシピのような慣習的・日常的シナリオを喚起しにくい。そのため、これら2つの変化は2つの別々の事象であると見なされ、(27b)のように2つの節で表現されることが選択される。

複合変化結果構文は統語的・意味的に複雑な構文であるが、この構文が選択されるのは、簡素化されたレジスターであるレシピの *simplicity* を補うためであると考えられる。即ち、情報を凝縮して表現するという目的のために、構文に課される制約を少し緩和してでも、複合変化結果構文が選択されることがあると考えることができる。

4.3 吉川 (2009) との比較

レジスターと文法現象（特に結果構文）の関係についての研究として吉川 (2009) を挙げることができ、本研究と関心・目的ともに共有する点も多い。以下では吉川と本研究の共通点と相違点を明らかにすることで、本研究の狙いをより明確にすることを試みる。結果構文 (*resultative*) とは、結果状態を

8) http://inspiredbythecreator.blogspot.jp/2009_10_01_archive.html [2015/11/30] より改変。下線部は著者による強調。

表す結果句 (result phrase) を伴い、「対象が状態変化する」という事象を表す構文のことであり、(28) のようなものが結果構文に該当する。(28a) においては *into pieces*, (28b) においては *red* が結果句である。

- (28) a. He broke the vase into pieces.
 b. He sneezed his nose red.

吉川 (2009) は中立的文脈では正しく解釈されない結果構文が、広告、ニュースヘッドライン、レシピといった特定のレジスターにおいては適切な解釈を得ることを論じている。例えば、(29) のような結果構文は、広告文で使用された時には適切な解釈を得る (29a) 一方で、中立的文脈において適切な解釈を得ることは困難である (29b)。広告という特定のレジスターにおいて用いられることで、「広告のエンジンオイルを入れた車で運転すると、エンジンが綺麗になる」という行為から結果への因果関係がその場限りにおいて構築され、適切な解釈を得ることが可能となる。

- (29) a. Drive your engine clean.
 b. #John drove his engine clean.

(吉川 2009 : 153)

(30) はレシピ文の例である。(30a) の「イカを輪切りにせよ」という指示では、例えば、内蔵を取って、骨を抜き、中を洗って、皮を剥ぐ、という一連の調理シナリオが補足され、適切な意味解釈を得る。一方、(30b) では「牛肉を輪切りにせよ」という指示を受けた時に、どのように切れば牛肉が環状になるかというシナリオを補足することができない場合、適切な意味解釈を得ることはできない。

- (30) a. Cut squid into rings.
 b. #Cut beef into rings.

(吉川 2009 : 156)

以上をまとめたのが図2である。図2が示すように、個々の語彙要素からは算出されない行為 (E1) と

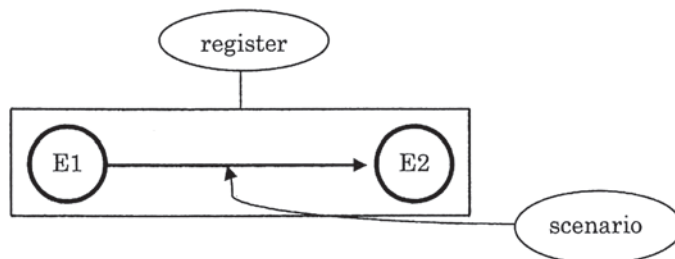


図2 レジスターに基づく因果関係・シナリオの補完 (吉川2009 : 157)

結果 (E2) の間の因果関係・シナリオが、レジスターによって想起・補完され、結果として、中立的文脈では成立しない因果関係についても特定のレジスターにおいてであれば適切に解釈することが可能となる。

本稿は吉川 (2009) の分析を受け入れており、実際先に見たように、複合変化結果構文の選択についてもレジスターの喚起するシナリオが重要な役割を果たしていると考えている。加えて、レジスターが文法現象に対して重要な動機付けを持っていると考えている点でも本稿と吉川は共通している。両研究で異なるのは、現象への注目の仕方であると言える。吉川はレジスターによって因果関係・シナリオが補完される語用論的プロセスに注目し、ある表現が何故特定のレジスターにおいて適切な意味解釈を得るのかという点に注目している。それに対して本稿では、中立的文脈において多くの場合従うと考えられている語彙意味論的制約に注目し、その制約に違反していると思われる表現がレシピにおいて用いられていることについて議論している。制約への違反がレシピにおいてはある程度許容される理由として、レジスターそのものの特性を考慮に入れる必要があることを論じている。従って、両研究は異なる角度から現象を見ていると言うことができるだろう。

4.4 ここまでのまとめ

以上、調理動詞、省略構文、複合変化結果構文について見てきた。通常の文脈においてこれらには一定の語彙意味論的制約が課されるが、レシピという特定のレジスターにおいてはそれらの制約が成り立たないこともある。調理動詞においては、様態・結果相補性仮説が成り立たない事例が数多く観察される。省略構文については、通常であれば状態変化動詞の直接目的語を省略したり前置詞を省略したりすることは困難であるが、レシピにおいては容易に省略が可能である。複合変化結果構文については、通常の文脈であれば時間の一体性の条件が課されるどころ、レシピにおいてはその適用が緩和されることがある。レシピにおける制約の不成立及び緩和は、レジスターを考慮に入れることなくして検討することは難しい。語彙意味論的制約について検討する上で、レジスターについても一定程度考慮する必要があることを示唆している。仮説や制約への反例が見つかった時に、それを直ちに棄却するのではなく、どのような時に成り立ちどのような時に成り立たないのか、レジスターの観点から検討することも必要であるように思われる。

5. 英語教育への含意

以上、レシピをケーススタディとして、語彙・構文の選択とそれらの動機付けについて見てきた。通常の文脈から見ると特異な振る舞いを示すレシピの文法現象を捉えるためには、レシピというレジスターを考慮に入れる必要があることが分かる。どのような表現が容認可能もしくは不可能であるのか、どのような表現が選択されるのかということは、特定のレジスターに照らし合わせて決定される側面が大きく、用いられる表現とレジスターは不可分の関係にあると言える。だとすれば、英語教育において、次の2点について明示的に指導することは有用であるように思われる。

- (31) a. 特定のレジスターにおいて選択される／好まれる表現

b. レジスター自体の特性

例えば、本稿で見てきた調理動詞、省略構文、複合変化結果構文は、どのような文脈にでも自由に生起するわけではなく、レシピという特定のレジスターにおいて頻繁に用いられるものである。表現の過剰使用を防ぐためにも、レジスターに照らし合わせた形で指導する必要があるだろう。加えて、では何故、そのような表現が特定のレジスターにおいて用いられるのかということについては、そのレジスターの特性に言及する形で指導していく必要があるように思われる。それによって、「このような表現がレシピには多い」と言うだけでなく、「何故、このような表現がレシピにおいて用いられているのか。このような表現を用いる目的は何か」という点にも注意を向けさせることが可能となる。

語彙・構文の選択の問題は、表現の「産出」の問題と結び付く。与えられたテキストを単に「理解可能か」ということに留まらず、どのような形で表現を積極的・方略的に選び出していくか、という問題である。レジスターにおける表現とレジスター自体の特性に注目することを通して、「理解」だけでなく「産出」にも注意を向けさせることが可能となるのではないだろうか。

本稿ではレシピをケーススタディとしたが、例えばニュース記事やビジネス文書など他のレジスターにおいても、本稿で提示した観点から見てみる必要がある。実際には、言語とは無数のレジスターの集合体である。どのような場面でも、多かれ少なかれ、それぞれ特徴的な語彙や構文が用いられ、レジスターとしての特徴を示していると言える。従って、本稿で提示した観点はレシピのような特定の領域のみに限定されるものではない。あらゆる場面におけるあらゆる文法現象を分析もしくは指導していく上で必要となってくる観点であると言える。

6. 結語

本稿ではレシピにおける語彙・構文の選択に注目し、それらがレシピというレジスターに一定程度動機付けられていることを示した。より具体的には、以下のことを論じた。

(32) 調理動詞：

調理動詞には様態・結果相補性仮説に対する反例となるものが数多く観察される。これは特定の領域において手段や方法を詳細に区別するためであり、レジスターの観点からもこの仮説について検討する必要がある。

(33) 省略構文：

a. 通常の文脈において状態変化動詞が伴う直接目的語を省略するためには、Principle of Omission under Low Discourse Prominence が要求する特別な読みが必要となる。しかし、レシピにおいてはこの原則が要求する特別な読みなしに、直接目的語が省略されることがある。これは、レシピにおいては、省略された要素を意味的に復元することが容易であること、省略された要素の照応先は言語的に実現していないことが多いことに動機付けられていると思われる。

b. レシピにおいて前置詞 *of* が省略されることがあるのは、「単位 of 材料」の構造をしている

ため2つの要素間の関係が明白であること、特に「材料」部分(図1)に現れている場合、それがある単位分の材料であることが容易に理解可能であることに動機付けられていると思われる。

(34) **複合変化結果構文：**

通常の文脈であれば、複合変化結果構文には時間的一体性の条件が課される。しかし、レシピにおいてはそれが緩和されることがある。これは、レシピにおいては調理手順という慣習的・日常的シナリオを喚起しやすいことに依っているとと思われる。通常であれば2つの事象として捉えられるものが、1つの調理手順として見なされ、1つの事象として捉えられるために、単一節(複合変化結果構文)が選択されることがあると考えられる。

(35) **簡素化されたレジスターとしてのレシピ：**

以上で示した語彙や構文を選択することは、「一文を短くし情報を凝縮して表現する」という簡素化されたレジスターとしてのレシピの特性に適うものである。

(36) **英語教育への含意：**

上記の観察と分析を踏まえると、英語教育において、特定のレジスターにおいて選択される/好まれる表現、及び、レジスター自体の特性について明示的に指導することは、次の点で有用であるだろう。即ち、「何故、このような表現が用いられているのか。このような表現を用いる目的は何か」という言語表現産出の問題に注意を向けさせることが可能となる。

本稿では以上のように、文法とレジスターの関わり合いについて、語彙意味論的制約とレシピの特性を中心に検討した。本稿で扱った現象やレシピに限らず、文法とレジスターの関わり合いについて観察・分析していくことを通して、言語理論だけではなく言語教育に対しても資する知見が得られることが期待される。

参考文献

- 朝日祥之. 2015. 「方言」 斎藤純男・田口善久・西村義樹(編)『明解言語学辞典』206-207. 東京:三省堂.
- Beavers, J. and A. Koontz-Garboden. 2012. "Manner and Result in the Roots of Verbal Meaning." *Linguistic Inquiry* 43, 331-369.
- Biber, D. 2009. *Register, Genre, and Style*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, G. and G. Yule. 1983. *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fellbaum, C. 1986. *On the Middle Construction in English*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Ferguson, C. A. 1981. "'Foreigner Talk' as the Name of a Simplified Register." *International Journal of the Sociology of Language* 28, 9-18.
- Ferguson, C. A. 1982. "Simplified Registers and Linguistic Theory." In L. Obler and L. Menn eds., *Exceptional Language and Linguistics*. 49-66. New York: Academic Press.
- Ferguson, C. A. 1983. "Sports Announcer Talk: Syntactic Aspects of Register Variation." *Language in Society* 12, 153-172.
- Ferguson, C. A. 1994. "Dialect, Register, and Genre: Working Assumptions about Conventionalization." In D. Biber and F. Edward eds., *Sociolinguistic Perspectives on Register*. 15-29. Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, A. E. 1991. "It Can't Go Down the Chimney Up: Paths and the English Resultative." *BLS* 17, 368-378.
- Goldberg, A. E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University

of Chicago Press.

- Goldberg, A. E. 2001. "Patient Arguments of Causative Verbs Can Be Omitted: The Role of Information Structure in Argument Distribution." *Language Science* 23, 503–524.
- Goldberg, A. E. 2005. "Argument Realization: The Role of Constructions, Lexical Semantics and Discourse Factors." In J. Östman and M. Fried eds., *Construction Grammars: Cognitive Grounding and Theoretical Extensions*. 17–43. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Goldberg, A. E. 2010. "Verbs, Constructions, and Semantic Frames." In M. Rappaport Hovav, E. Doron, and I. Sichel eds., *Lexical Semantics, Syntax, and Event Structure*. 39–58. Oxford: Oxford University Press.
- Holmes, J. 2008. *An Introduction to Sociolinguistics* (3rd edition). London: Routledge.
- Hudson, R. A. 1996. *Sociolinguistics* (2nd edition). Cambridge: Cambridge University Press.
- 貝森有祐. 2014. 「レシピから見る英語結果構文の選択と制約：状態変化と位置変化が両立する事例に注目して」『社会言語科学会第34回大会発表論文集』203–204.
- 貝森有祐・野中大輔. 2015. 「複合変化結果構文の選択：競合表現の観点から」『日本認知言語学会論文集』15: 740–745.
- Kittredge, R. 1982. "Variation and Homogeneity of Sublanguage." In R. Kittredge and J. Lehrberger eds., *Sublanguage: Studies of Language in Restricted Semantic Domain*. 107–137. Berlin: Walter de Gruyter.
- Klenová, D. 2010. *The Language of Cookbooks and Recipes*. Master's Thesis. Masaryk University.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav. 2013. "Lexicalized Meaning and Manner/Result Complementarity." In B. Arsenijević, B. Gehrke, and R. Marín. eds., *Studies in the Composition and Decomposition of Event Predicates*. 49–70. Dordrecht: Springer.
- Massam, D. and Y. Roberge. 1989. "Recipe Context Null Objects in English." *Linguistic Inquiry* 20, 134–139.
- Matsumoto, Y. to appear. "Constraints on the Co-Occurrence of Spatial and Non-Spatial Paths in English: A Closer Look." Manuscript. Kobe University.
- 松瀬育子・今泉志奈子. 2001. 「中間構文」影山太郎（編）『日英対照 動詞の意味と構文』184–211. 東京：大修館書店.
- 野中大輔. 2015. 「文脈から見る場所格交替：図と地の選択を超えて」日本英語学会第33回大会スチューデントワークショップ『意味研究における文脈の役割：認知意味論の新展開』11月21日. 関西外国語大学.
- 奥野浩子. 2003. 「結果構文に対する『被動者制約』と構文融合」『人文社会論叢. 人文科学篇』9, 159–170. 弘前大学.
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin. 1998. "Building Verb Meanings." In M. Butt and W. Geuder eds., *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*. 97–134. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Romaine, S. 2001. *Language in Society: An Introduction to Sociolinguistics* (2nd edition). Oxford: Oxford University Press.
- Yasuhara, M. 2013. "A Modification of the Unique Path Constraint." *JELS* 30, 355–361.
- 吉川裕介. 2009. 「広告, レシピ, ヘッドラインに現れる結果構文：関連性理論からの一考察」『日本語用論学会大会研究発表論文集』4, 151–158.

■
貝森 有祐 (Kaimori Yusuke)

所属：杏林大学外国語学部非常勤講師

専門：認知言語学, 英語学

Email：yusuke_kaimori@yahoo.co.jp